

1. あらすじ

カエルの楽園は、ソクラテスというアマガエルの主観で書かれている。

アマガエルの『ソクラテス』の故郷は、元々は平和の国だったが凶悪なダルマガエルの群れがきてから地獄に変わった。毎日のようにアマガエルが食べられていくのに嫌気がさしたソクラテスたち 60 匹はアマガエルたちが平和に暮らす事ができる『楽園』を探しに行く。道中は、荒野や危険な動物たちにより仲間が死んでいき結局『ナパージュ』に着いたのはソクラテスとロベルトの二匹であった。このナパージュはツチガエルたちの国でソクラテスに対しても非常に親切だった。そして、ナパージュには『三戒』というものがある。三戒は『カエルを信じろ。カエルと争うな。争うための力を持つな。』の 3 つあり、ナパージュのカエルたちが生まれた時から大切にしているものである。ナパージュのカエルたちはこの三戒を守っている限り争うことはないと考えている。そして『謝りソング』というものもあり、ナパージュの祖先が過去に犯した過ちを謝り、世界の平和を願っている。しかし、ツチガエルたちは何に対して謝っているのはわからず、謝ることで争いを避ける事ができていると思っている。

あるとき、国一番の物知りである『デイブレイク』というカエルを紹介してもらう。デイブレイクは毎日朝と夜に、ハスの沼地でみんなを集めて、いろんなことを教えているツチガエルだ。このデイブレイクは三戒と謝りソングを非常に大切にしており、必ず集会の最後に謝りソングを歌い、三戒を確認する。ソクラテスはデイブレイクにナパージュの歴史について尋ねた。デイブレイクは「かつて、周辺のカエルの国を奪い、大勢のカエルたちを虐殺した。私がいなければ、ナパージュのカエルたちは再び周辺のカエルたちを殺すだろう。だから毎日、朝と夜に正しく生きる道を説いているからこそ、彼らはなんとか悪い行いをせずに生きている。」と考えていた。その後、『ハンドレッド』という滅茶苦茶なでたらめを言いまくっている（と噂される）嫌われ者のツチガエルに出会う。ハンドレットはソクラテスに遠い昔の祖先が一度だけ悪いことをしたのを、永久に謝り続けるのか。三戒のおかげでナパージュの平和が守られているわけではない。偉大なる『スチームボード様』という僭主がいること。さらに大昔に『南の沼のウシガエル』たちと争った事があり、いろいろな国のカエルたちが争った時代があったことを教えた。

ソクラテスとロベルトは、スチームボードに会いに行く。彼は、遠い昔に楯突いたナパージュのカエルたちを、最後には「ナポレオン岩場（という場所）で何百というカエルを見せしめに殺した」。その後、一時は支配していたが今は支配していない。ツチガエルは住みやすい場所を提供し、スチームボードはその代わりにカエルたちを守っていること。三戒はもともとスチームボードのために作られたことを教えてくれた。ソクラテスは、ナパージュはスチームボードのおかげで平和なのかもしれないと考えるようになる。

ある日、平和の国に悲鳴が響き渡る。南の崖の方から聞こえたため、向かってみると、一匹のツチガエルが「南の国のウシガエルが崖を登ってきた。」と言う。デイブレイクはそんなはずがない、カエルはみんな心優しいと言い、体の大きい力のある『ハンニバル三兄弟』は間違いなくツチガエルが来た、と対立する。デイブレイクは「戦いたいだけだ！三戒を破るつもりだ」という。デイブレイクは彼らのことが大嫌いなのだ。

ハンドレッドにハンニバル兄弟について尋ねた。前にも強い風が吹いて木が倒れ大勢のカエルが木の下敷きになったことがある。その時に何匹ものカエルを助けたのは彼らということ。彼らは、ウシガエルに勝てるほどの力があることを教えてくれた。

それから、ウシガエルは南の崖に来た。ナパージュのカエルたちは心配になり、元老会議が開かれることになった。そこで登場するのは、『プロメテウス』という元老と『ガルディアン』というお腹に9本の皺がある最年長の元老だ。プロメテウスは「これ以上ウシガエルが来るのなら、争うことも辞すべきではない。」と述べるが、ガルディアンは、「三戒がある限り争いは絶対に許されない。話し合えば解決する。」と述べる。この一件があり、デイブレイクは今まで以上に三戒の大切さを説くようになる。

ソクラテスは、ハンドレッドに話を聞く。そこでハンドレッドは『エンエン』というヌマガエルの国があり、ヌマガエル同士が争って二つに分かれた。一つの国はこっそりとナパージュの若いツチガエルを攫うことを教えてくれた。

話が平行線の元老会議でプロメテウスは、スチームボードに南の崖を見張ってもらうことを提案する。元老会議で可決されたため、プロメテウスがスチームボードにお願いしに行ったところ「自分がウシガエルを追い払うときにはツチガエルも一緒に戦うこと。自分が他の敵に襲われたときにも助けてほしい。」を条件に出した。これに激怒したガルディアンたちは、三戒を死守する方針を固める。デイブレイクは『戦いをするための協定』と言い、断固拒否の姿勢をとる。

この他にもデイブレイクの話に感銘を受け、三戒を死守することを心に誓う子どものカエル『フラワーズ』たちも登場する。

この、ウシガエルをめぐる三戒改正（ハンニバル兄弟やスチームボードと協力してウシガエルと争うことも辞さない）派と三戒死守（争うことを絶対に許さない。話し合いで解決できる）派の対立はどうなるのか。そしてナパージュの未来はどうなるのか。行く末はこの本を読んで確認してもらいたい。

2.書評

この本を手にとった理由は、友人に紹介されたからだ。もし紹介されていなければこの本を手にとることはなかっただろう。百田直樹氏は「永遠のゼロ」をデビュー作に「海賊と呼ばれた男」など多くの本を手がけている。百田氏は政治の右翼的な発言をSNSに投稿し、たびたび物議を醸す。その印象が非常に強いため、このような本は右翼的な内容なのではないかと思っていたからだ。結論から述べると、できる限り中立に史実に擬えて作ら

れている。そしてあくまでも「フィクション」である。最初はクスッと笑えるシーンが多く、「こんなこと言う奴いるのかよ」と思うこともある。しかし読み進めていくと実際にテレビなどの放送でも聞いたことがあるようなことが書かれてくる。そして、クスッではなく、だんだんと他人事には感じるができなくなってくる。

この舞台『ナパージュ』。英語の綴りだと Napaj。そう『Japan』日本を舞台にされている。『三戒』も「カエルを信じろ」は除くが、「争うな・力を持つな」は、『戦争放棄・交戦権の否認・戦力不保持』の憲法第9条だと考えられるだろう。またお腹に9本の皺がある『ガルディアン』は民主党だろう（9本の皺＝第9条という根拠にもなる）。国一番の物知りで朝、夕に情報を教える『デイブレイク』は夜明けの意味。朝日が上がるため、朝日新聞だと考えられる。このように『』の言葉をそれぞれ言い換えると、以下の表になる。

『』の中	言い換えた言葉	備考欄
ソクラテス		哲学者からきている。自分で考えることができるカエル。
ナパージュ	日本	Napaj → Japan
三戒	憲法第9条	非核三原則という考え方もあり。
デイブレイク	朝日新聞	デイブレイク＝夜明けの意味。夜明けには朝日が登るため。
ハンドレッド	百田尚樹	ハンドレッド＝100。ナパージュの嫌われ者でデイブレイクにも嫌われている。
スチームボード	アメリカ	かつて、ナパージュのカエルを大量虐殺した。今では他の国からナパージュを守っている。
南の沼のウシガエル	中国周辺	
ハンニバル三兄弟	自衛隊	ナパージュを守る唯一のもの。
プロメテウスとガルディアン	自民など（改正派） 立憲民主など（反対派）	
エンエン	北朝鮮・朝鮮半島	
戦いをするための協定	日米安全保障条約	
フラワーズ	SEALDs	デイブレイクの話に賛同し、改正反対に断固拒否した、若いカエル。

先にこの本は史実に擬えて書かれていると書いたが、他にも「予言書」と言われることもある。

この本は2016年2月23日に初版が発行された。つまり、執筆をしているのはもっと以前からだろう。この本が出版されてから四ヶ月後の2016年6月9日に、中国軍艦が初めて、尖閣沖の接続水域に侵入したとき、朝日新聞の社説は「軍艦の行動が意図的なものか、偶発的だったのかも不明だ」「対話の中で、お互いの意図を理解し、誤解による危機の拡大を防ぐ」と述べていた。それとほとんど同じ内容がこの本には書かれている。南の崖を登ってきたウシガエルに不安を抱くツチガエルたちに対し、デイブレイクやガルディアンたちは「ウシガエルは虫を追っていて、うっかりと南の草むらに入ってきただけかもしれない。あるいは、見学に來ただけかもしれない」「とことん話し合えば、必ず明るい未来が開ける」と述べる。朝日新聞の社説では「近海を巡回中に間違えて入ってしまった」など、どこかで聞いたことがある意見が多々見えた。偶然の一致かもしれないが、実際に予言としての的中しているところがある。

私は、9条の内容として捉えたが、非核三原則や、沖縄問題・肥大化したメディアなど捉え方は様々ある。これがこの本の面白いところの一つだろう。

さて、私は読書をするが、「読みやすい本」と「読みにくい本」に出会う。私の中で読みやすい本の一基準として、「話の内容がイメージできるか」ということがある。文字を目で追っているが、頭の中でその情景がイメージできる本は非常に読みやすく、そうでない本は読みにくく感じるということだ。その点で言うところのカエルの楽園は、物語として読むならば非常に読みやすい。寓話の形がとられているため、すらすらと読むことができるが、話の内容を細かく考えると非常に読みにくい。それほどよく考えられて作られている。

例えば、デイブレイクに反対する意見が上がったときに、彼は「お前なんかここで暮らせなくできるんだぞ」と言う。自分が気に入らないものをみると、その意見を撤回させるか、そもそもその場にいらなくさせる。お局が気に入らない社員を陰でいじめて、それを苦にその社員が会社を去っていくことなどこれの一例に挙げられるだろう。このように百田氏は現在の風刺をこの本で表現している。

また、百田氏はこの本を書くときにできるだけ中立の立場に立って書くことを意識したと述べている。読んでみるとわかるが、普段の過激の発言から見れば中立の立場にいることに努力したことが伺える。もちろん「ハンドレッド」という嫌われ者が出てきて、いろいろなことを言うことがあるが。

この本を高校生に紹介するかと言われれば、多分しないだろう。なぜならば、周りの意見を吸収している年代の子がこの本と出会うことで、百田氏の意見に流されてしまう可能

性があるからだ。自分の意見をしっかり持っている大学生以上の方に紹介したいと思う。
この本を読むことによって、かつての史実を知ることと同時に百田氏の意見を知ることが出来る。

百田氏のギリギリを攻めたこの本を面白いと読むか、少し読みにくいと感じるかは本当に人それぞれだが、私は寓話の形をとったこの本は面白く、かつ新しいものになっていると思う。